

地域博物館と学校教育の連携・融合についての一考察：総合的な学習への対応を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 準二, 内田, 昌宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008430

地域博物館と学校教育の連携・融合についての一考察

—総合的な学習への対応を中心として—

A Study of Works in closer Cooperation
with a Local Museum and School Education

山崎 準 二*・内田 昌 宏**

Junji YAMAZAKI and Masahiro UCHIDA

1. はじめに

地域博物館は今日、中央省庁の再編に連動した国立博物館独立法人化、生涯学習の一拠点としての役割分担、学校教育との連携・融合の必要性などを背景にして、その新しいあり方や体制づくりが問われようとしている。ことに、最も博物館利用率の高い学校教育とのかかわりは、重要視されるものである。小・中学校においては、平成14年度から総合的な学習が本格的に導入される。これによって、地域の歴史や学習素材について豊富な情報、物的な資料・施設、人的な知識・技能、体験活動のノウハウなどをもっている博物館活用のニーズが、ますます高まりをみせることが考えられる。

この本格的な導入が目前に迫った総合的な学習に、地域にある博物館が、よりフレキシブルに対応していくためには、いくつかの改善が求められる。富士市立博物館における総合的な学習移行期の取り組みの事例をもとに、その成果と課題について検討し、これからのあるべき姿を考察していくことにする。

2. 富士市立博物館における総合的な学習への対応の概略

本館においては、小・中学校の総合的な学習の移行期に入り、次のような取り組み・学校サイドへのはたらきかけを行っている。

- ①「小・中学校のための博物館利用の手引き」の発行
- ②学校へ出張授業・体験活動支援（紙漉・土器づくり・火おこしなど）
- ③子ども向け展示会・講座の工夫（紙 かみんぐ 博物館・手すき和紙教室）
- ④継続的な情報提供（博物館だより・博物館かわらばん）
- ⑤教員向けの実技研修会の開催

これらのうち、①については、移行期以前の数年前より発行しており、富士市内はもとより、近隣の富士宮市・芝川町、その他前年度利用の多かった市外の小・中学校に配布している。

この手引きの内容としては、社会科の各学習単元と博物館資料の活用、総合的な学習における博物館の活用事例の紹介、小・中学校の社会科副読本と博物館展示・施設の対応表、体験学習の事例と申し込み方法、博物館施設の内容紹介などとなっており、博物館利用の事前計画・

*教育学部教授 **富士市立博物館指導主事

指導の際に役立てられている。また、⑤については、主に市内・外の小・中学校社会科主任者会、図工科・美術科主任者会とタイ・アップして、夏休みの時期を中心にして、紙漉、型染め、火おこし器づくり、機織りといった実技研修会を実施している。この他の②～④の取り組みについては、後ほど改めてくわしく述べることにする。

3. 学校への紙漉体験出張指導について

本館では、従来より学校の授業における人的・物的な支援を行ってきた。主な事例としては、紙漉、土器づくり、火おこし、米・ソバ・大豆の脱穀などの体験活動支援である。全体の傾向としては、小学校低学年の生活科導入以降、ソバの脱穀体験が増えた。また、環境教育の位置づけ以後は、牛乳パックを原料にした紙漉体験が目立つようになった。さらに、総合的な学習の移行期に入り、グループ単位で原料を選択（例えば、三極とパルプ）した紙漉体験の事例もみられるようになってきている。

さまざまな種類の体験活動のうち、「富士山と紙」を主要なテーマにしている本館では、とりわけ紙漉体験の支援の整備・充実に重点をおいてきた。博物館独自の事業として、十年以上前から、夏休み向けに「小学生の手すき和紙教室」を実施してきている。だが、学校の授業における紙漉体験支援については、従来は、単発的な対応の域にとどまっており、原料の準備や指導者の確保に課題を残していたのが実態であった。そこで、総合的な学習の移行期にはいった平成12年度から、市内の10校を対象にして、紙漉体験出張指導事業を予算化し、実施することになった。

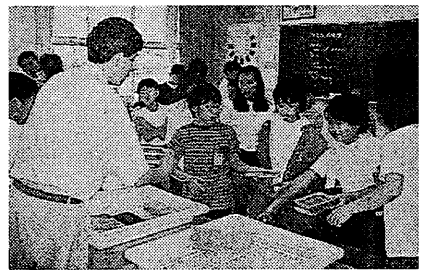
この事業の運用にあたっては、自主的に紙漉の活動に取り組んでいる「富士手漉き和紙の会」に協力を得ることとし、原料づくりや紙漉指導に博物館指導主事、学芸員とともに参加していただくことになった。

この事業のスタートにあたり、まず、富士市小学校社会科主任者会場で、目的と内容の説明を行い、周知をはかった。

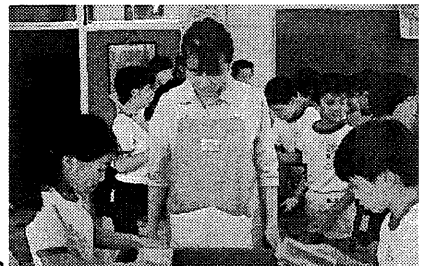
また、「博物館かわらばん」「博物館だより」などを通しての広報活動も行った。

その結果、社会科学習や総合的な学習の一環として紙漉体験支援を希望する小学校から、申し込みがよせられた。

この事業の実際について、くわしく述べることにする。まず、事前に博物館と学校側で打ち合わせをもち、紙漉体験の日時や目的などを明確にする。これによって、原料の種類や支援の重点などを定める。例えば、学習単元のなかでの紙漉体験の位置づけが、製紙工業の工程や環境・リサイクル問題に関連する場合は、原料は、パルプが中心になる。一方、伝統産業の学習の一環としての場合は、富士山麓の紙漉の歴史にかかわりの深い三極ということになる。これに加えて最近では、総合的な学習で、ケナフ栽培とワンセット化して、ケナフを原料にする場合もでてきている。



△紙漉方法の説明



△漉き棒道具を使用しての紙漉体験

また、この事業では、紙の専門知識をもった学芸員や製紙工場勤務経験のある富士手漉き和紙の会会員もいることから、指導主事がコーディネートする方式で、紙漉体験指導前後に子どもたちからの原料や製紙工程などについての質問を受け答えする場を設けている。例えば、原料づくりに必要なネリの効用について課題意識をもった児童が多かった学校では、パルプが水に平均的に溶けやすくするためにネリを使用することを重点的に説明するといった具合である。

クラス単位での紙漉体験は、授業時間に制約があるので、原料づくり－手漉き－脱水－プレス－板はり－乾燥といった工程が流れ作業的になりがちな面があるが、紙漉指導の際には、このような質問コーナーの時間をとったり、紙漉体験中の子どもたちへの声かけをしたりすることを心がけている。

この事業は、平成12年度に市内の小学校10校、人数では、1,275人の参加を得ることができた。ちなみに、原料については、パルプが6校、三椏が3校、パルプと三椏両方が1校であった。なお、この事業枠10校以外にも紙漉体験支援の要望が寄せられ、市内小学校2校ケナフ、市内中学校1校三椏、市外小学校2校パルプ、市外中学校1校パルプ・1校三椏といった紙漉支援を行った。

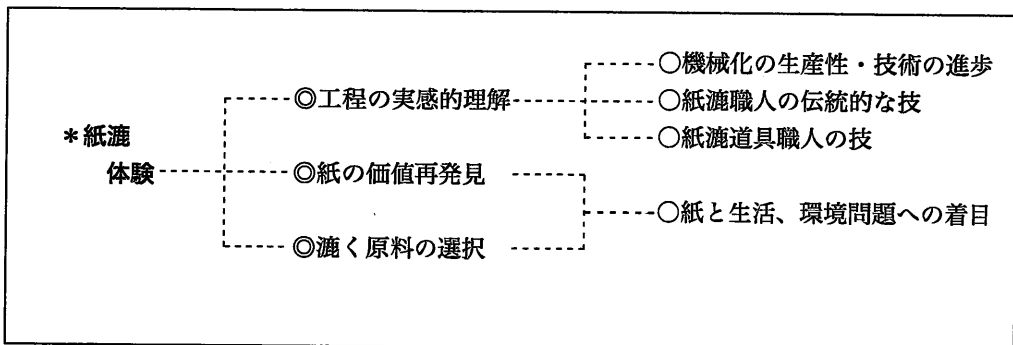


△パルプとネリをまぜる

この紙漉体験出張指導事業は、総合的な学習への移行期2年目をむかえた平成13年度も引き続き実施しているが、次のような成果・課題がある。

まず、成果としては、

- ・紙漉体験の設備・人員・来館費用などに制約のある学校サイドからは、このような出張形式で博物館が支援することが歓迎された。
- ・子どもたちにとってみると、博物館の職員や富士手漉き和紙の会会員らと交流しながら紙漉を体験することで、自分たちなりに試行錯誤しながら、紙漉の工程を実感的に理解したり、1枚の紙のたいせつさに気づいたりするなど、表(1)に示すような学習の方向性の展開・発展に結びついた。



表(1) 紙漉体験後の学習の方向性

- ・紙漉体験前に学校と博物館指導主事が事前打ち合わせを行うことにより、学習単元のねらいに即した体験内容（例：牛乳パックを使用した原料づくりや、ネリの役割に重点をおいた体験）を設定し、学習効果をあげることができた。
- ・子どもたちや教員の中には、学校での紙漉体験をきっかけにして、博物館が実施している手すき体験日や手すき和紙教室、小学生の手すき和紙教室に参加するいわゆるリピーターになる方もみられた。また、5学年における紙漉体験を契機に卒業証書漉きに取り組む小学校もでてきた。
- ・博物館の職員（主に学芸員）にとってみると、実際に学校現場の雰囲気や意見にふれることにより、学校における地域学習・体験学習のニーズを実感するとともに、博物館の教育普及活動のあり方について考える情報を得たり、展示会の広報を行ったりするひとつの機会になった。

その一方、課題としては、

- ・より多くの子どもたちに、より多くの紙を漉かせたいという声があるので、博物館の他の紙漉体験事業（手すき体験日、手すき和紙教室、小学生の手すき和紙教室など）との関連を意識した広報活動に取り組む必要がある。
- ・紙漉体験の目的は、単に紙を漉けばよいということではなく、子どもたちの学習課題の追求（例えば、パルプや三極、ケナフなどの原料づくりの工程から子どもたちにかかわらせてほしいという要望）と連動するものである。時間的・人的な制約を考慮しつつ、体験方法や博物館スタッフの支援の方法を工夫していくようにしていきたい。
- ・これからの本格的な総合的な学習の導入により、紙漉体験指導の依頼が増えることが予想されるが、学校の教育課程の関係で一時期に集中することや、貸し出し用の紙漉セットの整備・充実が求められることが考えられる。博物館スタッフの学校訪問や社会科・総合的な学習主任者会訪問などの場で、早めの日程調整を呼びかけるとともに、財政当局へのはたらきかけを行うようにしていきたい。
- ・博物館の教育普及活動全体にいえることであるが、指導・支援依頼に対して、人数的・時間的・物的な制約のある博物館が、いかに自らもバランスよく、スムーズに対応していったらよいか、利用者である学校側を交え、相手の立場になって改善策を探ることが重要である。

以上述べてきたような成果と課題をふまえながら、紙漉体験出張指導の新しいスタイルを模索しているところである。

4. 子ども向け「紙ing博物館」の開催

本館では、最大の利用者である小・中学生に配慮し、いわゆる来館者参加型展示会の一環として、夏休みむけに「紙ing博物館」をここ数年開催してきている。ことに、総合的な学習の移行期に入ってから、小・中学校の教育内容を意識しながら、表（2）に示すようなテーマを決めてきた。

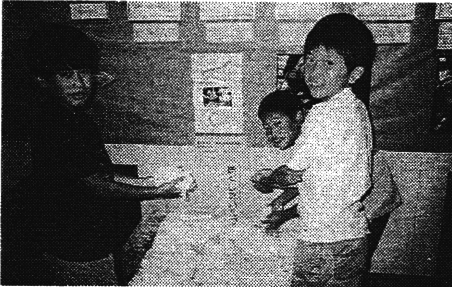
まず、平成12年度の非木材紙をテーマにした「紙ing博物館」のねらいと内容、反響について述べていくことに

- | |
|--------------------------|
| ○平成12年度 非木材紙－ケナフ・コットン・竹－ |
| ○平成13年度 トイレットペーパーのリサイクル |

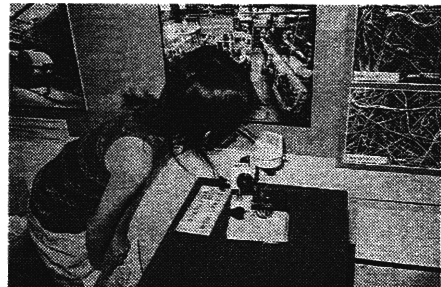
表（2）総合的な学習移行期の紙ing博物館のテーマ

する。この展示会では、従来の木材紙に対して、環境問題とともにクローズアップされ、学校での栽培活動にも取り入れられてきたケナフを中心にコットン、竹といった非木材紙の種類・性質・用途・製品などを子ども向けに紹介することにした。

展示の導入部では、子どもたちが一般的な紙の原料である木材チップを実際に触ったり、紙の繊維質を顕微鏡でみたりするコーナーを設けた。これは、従来の展示物を来館者に一方通行的にみせるやり方に終始するのではなく、最近学校教育の博物館利用の増加によって、高まりをみせている来館者参加型のハンズオン・バリアフリーといった要素を重視したものである。また、統計資料の取り扱いについては、数字の羅列にとどまるのではなく、子ども

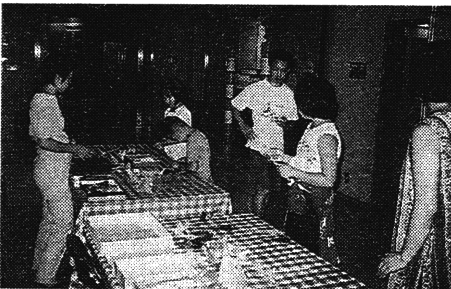


△ほぐしたパルプを手にする子ども

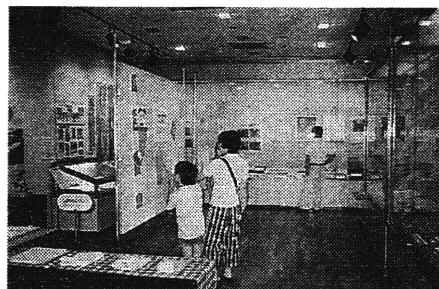


△紙の繊維を顕微鏡で見る

たちの生活経験に関連させる形を工夫したり、カラーによるグラフ化を取り入れたたりすることを心がけるようにした。そして、ケナフ・コットン(リントー)・バガス(サトウキビのしぼりかす)・竹などの非木材紙の種類を製品化されているものなるべくたくさん具体的に展示した。このことは、子どもたちの反応をみても単なる文字的な説明より、はるかに好評であった。



△紙で遊ぶ体験コーナーも設置



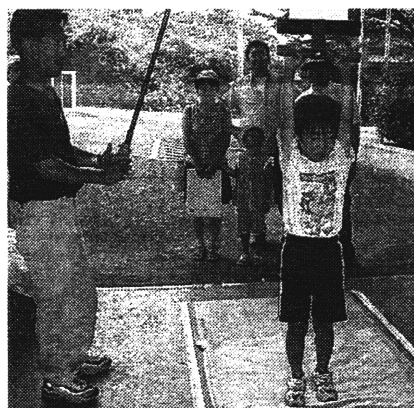
△持ち帰り資料用のサンプル展示

また、夏休みの自由研究のために来館する子どもたちが多くに対応するために、市内の製紙会社や諸機関などの協力を得て、子どもたちが持ち帰って自由研究作品を作成するのに役立ててもらうように、様々な種類の非木材紙のサンプルやケナフのタネなどを多数用意することにした。このような実物資料を提供することは、子どもたちの非木材紙についての実感的な理解に結びつくとともに、家庭の家族や学校の友達などにも非木材紙の話題を伝えることにもつながり、博物館にとってもその存在価値を認識してもらううえでメリットになった。

そして、この年から新たな試みとして、「紙^{かみんぐ}博物館」開催中に「紙の不思議実験室」を実施することにした。博物館職員より、紙の専門的な知識をもっている静岡県工業技術センターの方を講師に招き、子どもたちが興味をもちそうな紙の強度実験や、わりばしからの紙づくりなどを2回にわたって実施した。



△薬品処理したわりばしから紙をつくる



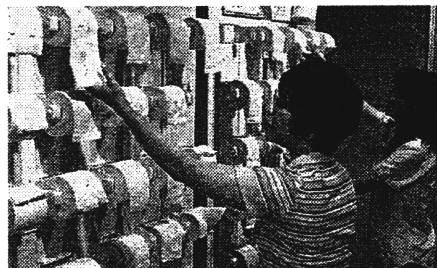
△紙の強度実験

この紙の不思議実験室には、100人をこえる親子が参加し、自分たちがわりばしからつくった紙を自由研究用のサンプルとして持ち帰ったり、講師の説明をメモにとったりした。

さらに、平成13年度は、トイレットペーパーを窓口にした古紙のリサイクルをテーマに「紙^{かみんぐ}博物館」を開催した。この展示会でも、子どもたちへの親しみやすさやわかりやすさをモットーに展示構成や展示方法を考えることにした。まず、展示の導入部分では、静岡県家庭紙工業組合の協力を得て、市販されているさまざまな種類のトイレットペーパーをならべ、色や模様をみたり、実際に肌ざわりを確かめたり、香りをかいだりすることにより、自分の五感でトイレットペーパーにふれるコーナーを設置した。このことは、来館者の反応をみると、いきなりリサイクルの統計資料をならべるよりも展示に興味をもってもらう点で好評であった。



△パルプや紙製品の具体的な展示



△ロールペーパーの手ざわりを体験

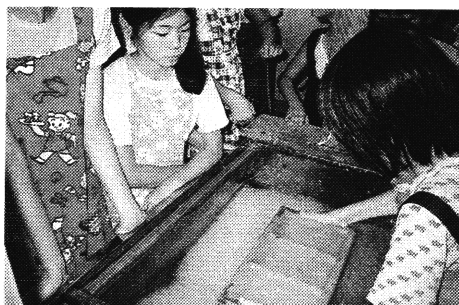
また、子どもたちが、日頃学校給食の牛乳パックの回収に取り組んでいることを生かすかたちで、平成12年度に回収された給食用牛乳パック約254万枚が約12万7千個のトイレットペーパーに再生産されていることを関連製紙工場の写真パネルとともに、紹介することにした。富士市内の小中学校のほとんどで牛乳パック回収に取り組んでいる現状を反映してか、このコーナーへの関心は高いものがあつた。この他に、地域や学校で行っている古紙回収にも着目した

展示も行い、自分たちが実生活のなかで、どのようなことをこころがけていったらよいかなげかけをしたり、製紙会社の原料や水のリサイクルの努力を紹介したりした。

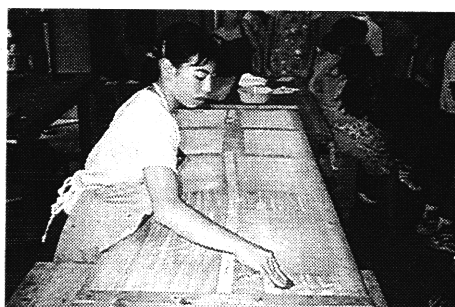
5. 小学生の手漉き和紙教室の開催

本館では、紙の町に生活する子どもたちに伝統的な手漉きを体験してもらうことを目的に、ここ10年来夏休み期間中に小学生高学年を対象とした「小学生の手漉き和紙教室」を開催している。先述したように、富士山麓の岳南地域では、江戸～明治時代にかけて三極の栽培が盛んに行われた。その歴史的な背景を生かすかたちで、三極を原料にした手漉き体験の機会をもうけ、手漉きのすばらしさや、紙の価値を実感的に理解してもらうことをめざしている。参加者の声を聞くと、兄弟・姉妹で連続してこの教室に申し込んだり、他の学校の子と友達になるのを楽しみにしたりしている子などがみられる。

この教室では、はがきやうちわづくりなどをおこなうが、例年同時期に実施される博物館実習の実習生も研修をかねてアシスタント役として参加し、博物館における教育普及活動の一端にふれるよい機会となっている。



△はがき3枚漉きにチャレンジ



△圧搾後の和紙を板に貼って干す

6. 博物館の情報提供

博物館の最大の利用者である学校に対して、「博物館かわらばん」(教師向け・子ども向け)や「博物館だより」などを通して、教育普及活動や展示会を中心に情報提供をおこなっている。



△「博物館だより」(教師向け)のサンプル


常設展示 学習シート No.2
編纂・発行 富士市立博物館

学校教育のはじまり

明治時代になると、ヨーロッパやアメリカなどの近代化された文化がとり入れられるようになりました。教育の制度についても1872年(明治5)に「学制」が公布され、児童や男女の別なく、学校で教育を受けることのないことが定められました。それ以前の江戸時代には、学問は武士や男子が中心であるものとされ、一般の人たちは寺子屋や私塾などに通うという状況でした。この「学制」以後、学校や教員・教材・教具などの制度がしだいに整備されていきました。

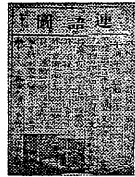
富士市内でも、いくつかの寺子屋が新しくできた学校に組みこまれたり、各地域で江戸時代の学問所出身の教員らを迎えたりしながら、学校教育が行われるようになったのです。

明治時代のはじめのころは、現在のように男女の別なく、誰でも学校に通える状況ではありませんでした。また、取得費も入すつ用意することができず、多人数であることでのる学習設備のような教材が提供されました。学習用紙は1873年(明治6)に東京編纂



▲ 学制 (明治5年制定)

学校でつくられたのが教科で、その単語、文法等によって整理されました。そして、各都道府県の各級学校で、大判和紙(たて紙・原紙)はとに黒一色や彩色で印刷され、各級の学校で使われました。その頃の子どもたちは、この和紙をもとに教科との習字を通して、いろは・算術・歴史や数学・算術などの学習に取り組んだのです。これらの学習の準備は、富士市内の黒一色の和紙で、黒い漢字が書かれた数箋なものです。全頁的にみても、めずらしいもので、当時の教育方法や印刷史を学ぶうえで重要な資料といえます。



▲ 算術 (明治6年制定)

△学習シートNo.2 (表面)

学習のヒント


◎提示されている学習用紙は、明治時代から、紙や鉛筆が安い値段で出まわる昭和初期までおなじみの学習用品でした。いったんかいた字や線は消さずつけて、使ったのです。みなさんが、今使っているノートや鉛筆と比べて、使いこころはどうだったと思いますか。

☞学校の校歌には、地域の自然や歴史、学校に学ぶ人たちへの思い、目標などがうたわれています。みなさんの学校の校歌についても書き出して調べてみましょう。

くわしくしらべたいひとのために

- ・市内各小・中学校の記念誌
- ・「目でみる富士市の歴史」鈴木智司 編集
- ・「富士市の教育」富士市教育委員会
- ・「富士市の教育(第二集)」富士市教育委員会
- ・「富士市史 中巻」富士市史編纂委員会
- ・「静岡県教育史」静岡県教育委員会
- ・「新編百景」文芸春秋

△富士市立博物館(富士市小坂町)
△富士市立図書館(富士市小坂町)



▲ 富士市立図書館 (富士市小坂町)

△学習シートNo.2 (裏面)

7. 博物館と学校の連携・融合への課題

これまで述べてきたように、博物館の最大の利用者である学校への支援のひとつとして、総合的な学習の導入に関連した本館独自のさまざまな取り組みを行ってきた。それらの取り組みの中には、紙漉体験出張指導事業のように学校側からも好評を得ているものもあれば、まだ、試行錯誤の段階のものもある。いずれにしても、博物館サイドと学校サイドそれぞれがお互いにアプローチしていく積み重ねの過程を経て、子どもたちにとっても、教師にとっても、博物館にとっても意義のあるしなやかな連携・融合のネットワークが形成されていくのではないだろうか。

まず、博物館サイドとしては、館内の職員の教育普及に対する共通理解をきづくことが前提になるだろう。各地の博物館職員と交流する中で経験的に感じるのは、学芸員の教育普及に対する姿勢に格差があることである。教育普及に前向きな方もいるが、よく耳にする言葉に「学芸員の本来の仕事は調査・研究であって、教育普及ではない」というものがある。なるほど、地域の博物館の学芸員は、人数も限られており、学問的な研究を進める施設・時間・予算は十分とはいえないというのが現状であろう。調査・研究と展示会をこなしていくことの意味の重さは、博物館に勤務する者ならば、誰でも理解できるであろう。だが、利用者あつての博物館・市民(おとなや子ども)に親しまれる開かれた博物館のあり方が、生涯学習の推進や総合的な学習の本格的な導入を背景にして、まさに問われようとしていることも現実である。学芸員にしてみれば、多大な収蔵品の整理にさえ時間がまわらないのに、学校に出かけていくまでもない考えるのは、わからないでもない。調査・研究のための条件整備・環境改善は必要なことであろう。しかし、学校という場での学芸員を含めた博物館職員と子どもたちや教師との教育普及活動を通したふれあいや交流は、その時限りではない新たな博物館理解や利用の出

発点になるのである。例えば、先述したように、本館で指導主事と学芸員が協力して行っている学校の紙漉体験支援事業をきっかけにして、博物館の手すき事業に参加する子どもも少なくない（この点では、本館の学芸員や他の職員の協力に感謝している）。従来は学芸員の資格取得の際、今日ほど教育普及活動の重要性が大学カリキュラムの中でいわれてこなかったということ指摘する方もいるが、調査・研究の蓄積、所蔵資料、展示、体験活動のノウハウなどといった博物館の人的・物的な資質の活用が、現場では求められていることを意識していきたいものである。調査・研究についても博物館内部で留まってしまうのではなく、学校教育への活用や市民への公開（展示・出版物・各事業など）をすることによって、さらに、磨きがかかるのではないだろうか。また、その姿勢が、博物館への支援者を増やすことにつながるのではないだろうか。そのような博物館外部へのキャッチボールを博物館内部の職員が事務・学芸・学校担当それぞれの仕事の一端でもお互いに理解しようとする気もちをたいせつにしながら、まず、一歩踏み出すことから始めていきたいものである。ともすれば、博物館組織が縦割り・分業（いわゆる内なる鎖国）になりがちなことの弊害とその改善は、博物館エデュケーター研究者の取り組み（例えば、国立民族学博物館を中心とした博学連携学習プログラムの試み）や、日本博物館協会の「博物館における学習支援に関する国際比較調査」の分析（『博物館研究』No.402平成13年11月）などで、最近よく指摘されることである。いかに、学芸員が学問的な価値のある調査・研究を望んでも、細かな予算的な手続きをするのは事務方であり、最大の利用者である子どもたちへのさまざまなはたらきかけ（例えば、調査・研究結果をワンクッションはさんで子どもたちにわかりやすく紹介する）の中心になるのは指導主事のような教育普及担当者である。博物館職員が、お互いの仕事の全てを把握することは困難であるとしても、それぞれの専門性・経験にもとづいて、意見やアイデアを出し合うことによって、小さなセクションのなわばり意識にとらわれず、博物館館員同士の足もとのチームワークづくりに取り組むこと（いわゆる内なる開国）が求められているのではないだろうか。その過程をふむことが、例えば、国内や欧米の先進的な博物館にみられるインストラクタ、キュレータ・オブ・エデュケーション、エデュケーターなどの配置や博物館ボランティアの導入といった、将来の博物館の組織づくりにもつながっていくのではないだろうか。

以上述べてきたことをふまえながら、ともあれ当面の課題である総合的な学習への博物館の具体的な対応・アプローチとして、

- 学習の需要の多い紙漉道具や火おこし器などの貸し出しセットの整備・充実
- 紙漉・脱穀体験をはじめ、空き教室を活用したミニ博物館づくりなどへの人的・物的支援
- 来館者の立場・観点に立ち、ハンズオンやバリアフリーに配慮した展示構成の検討と展示替え
- 展示各コーナーの学習シートの充実や、ITの活用を視野に入れた効率的・柔軟な学習者へのレファレンスのあり方の検討
- 博物館と学校との共同作業にもとづく博物館を活用した学習単元の開発などに重点をおいた取り組みを行っていきたいと考えている。

また、その一方、学校サイドの博物館利用にたいする理解や配慮にも学校・教員による格差があり、その改善が必要であるように思われる。中には、職員研修で博物館職員を学校に招いて、総合的な学習の素材研究の一環として地域のフィールドワークを行ったり、毎年紙漉体験を教育課程にもりこんで博物館の紙漉体験出張指導を活用したりする学校もあるが、博物館へ

の距離的・費用的な問題とは別に、利用の少ないところもある。市内の教員へのアンケートによると、博物館を利用しない原因に、博物館の利用手続きがわからない、博物館にどのような貸し出し資料があるのか知らないといった意見があった。先述したように本館では、利用の手引きや博物館かわらばん、博物館だよりの発行、社会科主任者会での説明などを通して、情報提供を継続的に行っているが、まだ十分とはいえないようである。博物館側の情報提供改善も必要ということになるだろうが、学校の教員自身が、まず博物館を利用してみて、初めてわかるということもあるので、いろいろな事前準備・指導（学習面・安全面など）はたいせつであろうが、教員も教室から一步踏み出して、博物館を活用した学習のおもしろさや意義を体験的・実感的に味わってほしいと思うのである。

さらに、子どもたちが博物館で学習する際の事前連絡への配慮という点についても課題が残る。ことに、先述したように総合的な学習では、従来に増して個人・グループの興味・関心が重視される。当然、博物館の展示見学についてもそれぞれポイントが異なってくるであろう。だが、現状ではそれに対応するだけの博物館職員の人数・時間に制約がある。学校側から、事前に子どもたちが何に関心をもっていて、どのような質問を用意しているのかという連絡があれば、プリント資料を準備したり、体験活動ができるように例えば、昔の脱穀用具をセッティングしたりといった対応を効率的に行うことができるのである。本館の場合は、小・中学校に配布する博物館利用の手引きに、社会科副読本の内容と展示内容の対応表の項目を設け、学校での事前学習に役立ててもらうように配慮している（平成14年度からは富士市教育委員会学校教育課の理解を得て、小・中学生個人に配布する社会科副読本の中に対応表の項目を取り入れることになった）。総合的な学習の導入で、従来の教育課程では、小学校に比較して博物館の利用体験回数が少なかった中学校教員の事前指導に、この対応表の活用をはたらきかけているところである。

この他に、もともと博物館と学校との開館日時と授業日時が合いにくい（ことに、祝日の翌日は閉館）、教員が資料の借用に行く時間が放課後夕方に集中し、博物館の事務的な手続き処理に負担がかかる、学校団体を受け入れる室内の休憩施設が不十分などといった日常的な課題もある。これらの点は、行政面が絡んでくるので、学校・博物館単位の解決は難しいかもしれないが、博物館と学校との連携・融合が深まりをみせれば、それを補うよい方法を見いだせるかもしれない。

まず、とにかく、博物館と学校との交流の輪を日頃からたいせつにし、お互いの特性や現状、ニーズなどを相手の立場になって理解することを心がけていきたいものである。

8. おわりに

総合的な学習という新たな学習スタイルが自然なかたちで定着していくのには、学校だけでなく、博物館を含む様々な地域の教育施設や人材の継続的な協力・支援が重要になってくることであろう。博物館に携わる者にとってみても、総合的な学習の導入を博物館の機能と役割を見つめ直すよい機会と前向きに受け止め、子どもたちがやがておとなになった時にも存在価値を認めてもらうことのできる博物館のあり方を利用者の声に広く耳をかたむけ、博物館内部のチームワークをいかしながら、探っていくことが重要であると思われる。